

一本の重さ 眞下 玄基

「痛い」その時早く気づけたらよかった。僕は中学1年の時地元の群馬から熊本の中学校に入学し、寮生活をするようになった。

3年生になりチームは自分たちが作り上げ日本一になると目標を決めていた。しかしその時自分では一つ悩みを抱えていた。それは左足の人差し指のけがだった。プロ選手でもけがはしてはいけないと言う。しかし自分は平気な気持ちで稽古に打ちこんだ。けがから1ヶ月が経ち痛みはあまりなかった。そして、3か月が経ち前回よりも指が腫れ心配になってきた。とうとうある日稽古をしていると指に痛みが走った。もの凄く痛かった。次の日病院に行った。レントゲンを撮った。診断結果は左足の人差し指である中性骨の疲労骨折だった。その後先生に言われた一言に絶望を抱いた。それは「全治1年」だった。先生が言うには「3ヶ月前にけがをしてそれが悪化した」と言った。

寮に帰り、親に電話した。親は悲しむように怒ってくれた。その中で「たった一つの体だ。自分の体は自分の力で大切にしろ」その時父の言葉が心に刺さった。涙がたくさん零れた。二年間のつらい出来事、きつかった出来事、努力したこと全てが頭をよぎった。とても悔しかった、悲しかった、寂しかった、治ってほしかった、嘘であってほしかった。その時は人生で一番最悪な瞬間だった。立ち治すために一週間かかった。

自分は6月にある郡中の団体に出ることを諦め、個人戦に出ることを決めた。全力でかかってやる。